

ある誤疎通

は多分に居心地の悪い状況になりつつある。

ミロ・アーヴィング・フェアファックス。先月の八日に十五歳になったばかりのこの少年は、立ち疲れた足裏を靴の中でもぞもぞと動かし解しながら、ナショナル・ギャラリーの青緑の丸屋根をぼんやりと見ていた。

と、ぼさぼさつと鈍い音がした。その音に、聞こえて来た方角を見やると、ミロの視界に白い鳩の集団が空を目指して空に次々と浮いている姿が見えた。

そう、ミロの立つこは、英国はロンドン屈指の待ち合わせ場所、鳩の糞の掃除に年間三千万円もの予算が使われるトラファルガー・スクエアである。

ロンドンのウェストミンスターに在るこの広場は、一八〇五年のトラファルガーの海戦を記念して造られたもので、当初はウィリアム四世広場という名前だったが、建築家のジョージ・レッドウエル・テイラーの提案によってトラファルガー広場と名を改めた。エドワード一世の時代には王家の厩であり、ジョージ四世が建築家のジョン・ナッシュにこの地域の再開発を依頼し、一八二〇年に設計、一八四五年に現在の形になったと、観光ガイドは語る。広場は五万人の収容能力を誇り、集會にも利用され、特に政治演説をする人が多いことでも知られている。

バッキンガム宮殿から伸びる、ザ・マイル、セント・ポー

ルズ大聖堂のある東へと伸びるストランド、南方を蛇行するテムズ河に沿って伸びているホワイト・ホール、トッテナム・コート・ロード駅、大英博物館の西を通りロンドン大学に伸びるチャリング・クロス・ロード、この大きな四本の道が交わる場所に、広場は位置する。

そして、それを約五メートルもの高みから見下ろす、片目片腕のネルソン提督像——イギリス海軍軍人（一七五八—一八〇五）。フランス革命後のヨーロッパを転戦し、戦傷により右目、右腕を失った。トラファルガー海戦でフランス艦隊を破りナポレオンのイギリス上陸を阻んだものの自らは戦死——その下に、提督を守護するかのように巨大なライオン像が四体、ぐるり囲んでいる。

このライオン像、極東の島国の百貨店の銅像のモデルになった事は一部の人間にとっては有名であるのだが、まあ、そんなトリビアより、この提督の足元に居るライオン達はロンドン観光の名所中の名所、かつ写真撮影のモデル歴百年以上と超絶に有名なわけで、異国の人々にも自国の人々にも親しまれている。

ライオンの形はしているが、実は猫をモデルにして作られたと囁かれる百獣の王は、就学前の子供なら、軽く十人くらいは背に乗せてしまえるのではないかと思うほどに巨大。そして、ここが一番肝心な所なのだが、まず英国人なら、この銅像の前で待ち合わせなんて、はずかしっ！ 信じられない、ダッサー！ と思うくらいにヤリタクナイ行動の一

つでもある。

そして、ミロ・アーヴィング・フェアファックス、この恥ずかしい思いを、かれこれ三時間弱も味わっている。

「いいか？ こつからチャリング・クロス駅までは乗り換えなしの一直線。で、チャリング・クロスからトラファルガー広場まで徒歩三分。さらに、ライオンの像は見落としよう無くデカイから、お前はここの前で立っっている!!」

「ええっ?! やだよ!! そんなの。ライオン前なんて!!」

「まあ、冬だし寒いから、チャリング・クロス駅の構内か、ミロが興味があるなら、セント・マーティン教会の中で待ち合わせ、とかでいいんじゃないかな?」

「……甘い、甘いぜ、カミュ……。お前はこいつの空闊把握能力を甘く見ている! 駅の構内なんかで待ち合わせてみろ! こいつは結局人混みに流されて、ついでに自分の好奇心にも流されて、絶対! どっかに行つてるに決まつてる!! セント・マーティン教会にしたつて、あそこじゃギャラーイヤブツク・シヨップやカフェもあるんだ。コイツを探してる間の方が、お前がハムステッドからチェリング・クロス駅に来る時間の倍はかかる!」

「いや、あそここの教会にはそうやって暇を潰せるものがあるからいいかな、と思つただけだよ……」

「いいんだ!! 親切心なんてコイツに出すな!! とにかく、ミロ、お前はライオンの前で待つていろ!! 動くな、歩くな、

好奇心だすなつ!!! 駅に着いたら、ライオンは何処か聞いて、辿り着いたら一歩もそこを動くなつ!! 分かつたな!!!」

二月十七日、ポール・リッジウェイの引退コンサートの翌日、カミュ・パロウとアイオリア・エインズワースが荷造りを始めたのを見ながら、ミロがカミュに、『今年は街の真夜中のミサに出ないのか?』と呑気に尋ねた事から、話は始まつた。

教会の改修工事に伴つて今年のミサは中止となり、来年の春にコンサートをを行う事になった事、カミュもアイオリアも今日の夕方に帰省する事、などミロにとっては寝耳に水の事態が発覚したのだ。

今年も真夜中のミサをやる。そうしたら、ポールの引退コンサートも終わつたこの先一週間、練習もしなきゃならないが、もしかしたら、誘えば一回くらいはカミュとまたロンドンに遊びに行けるのではないかと期待していたミロは、動転した。

「あのな……、ミサやるんだつたら当然もう楽譜とか、顔合わせとか、やつてるだろうが……」

溜息混じりにアイオリア・エインズワースが、肩をがっくりと落として力の無い声を上げたのも無理からぬ事と言えよう。

「だつて、顔合わせは去年やつたし、一週間も在れば去年もやつた曲だから大丈夫なのかなつて……」

尻すばみになる言葉に、アイオリアは天を仰ぎ、カミュは指を顎に当てて何かを考え込んだ。そして、
「それなら、ロンドンの真夜中のミサに出てみるか？」
と、言つたのだ。

カミュ・パロウが、ミロ・フェアファックスをロンドンで行われる真夜中のミサに誘い、ミロは一度がっかりした方喜んでその申し出に乗つた。だが、カミュと一緒に帰省して、イブまで約一週間も彼の実家になるのは気が引けたので、イブにロンドンで落ち合おうと、待ち合わせの方法を検討している、それまで荷物をもくもくとを黙つて詰めていた同室のアイオリア・エインズワースが慌ててカミュに進言し、その場を仕切つた。

ミロ・アーヴィング・フェアファックス、たかがトイレの個室に入つても、出てくる時にはもう間違つて清掃道具入れを開けてしまふ、というくらいに、絶望的に方向音痴だったのだ。

十二月二十四日、朝。

ミロは、昨日のうちに荷造りを済ませたりユックとバイオリン・ケースを目の前の床に広げて、ベッドの上に腰掛けていた。カミュとアイオリアの枕元に置いてある時計の音が部

屋に響いている。

何もしないで居るのは手持ち無沙汰、とバイオリンに手を伸ばして、これに夢中になつて時間を忘れることになつたら大変、と手を止める事二回。教科書でも読んでいるか、と荷造りしたりユックのチャックを開けて、せつかく荷造りしたのに、と考え直すこと三回。結局どうにも落ち着かないので、背中に大振りのオレンジ色のリュックサックとがっしりしたバイオリン・ケースを肩に引つ掛け、ミロは予定より二時間も早く寮を出た。

すると、バスと列車を乗り継いで、ロンドンのチャリング・クロスまで、列車は二十分しか遅れずに到着してしまつた。構内の時計を見上げると、十時二十五分。待ち合わせは午後三時である。

あまりにも早かつた。ミロは構内のフード・ショップでチーズ・サンドイッチを一つ購入してベンチに腰掛けてゆつくりと食べた。しかし、いくら食べる事が遅いミロでも、話をする相手もないのでは限界があり、十一時十五分前にはサンドイッチのゴミをゴミ箱に入れ、水呑場で喉を潤す、くらいの仕事は済ませてしまつていた。

困つたな。

とは思うものの、あまり思い詰める性質ではないので、これは早めに行つてカミュの薦めてくれたセント・マーティン教会を覗く時間が出来たと考え直し、いざトランスファルガー広場に出発する事にする。

構内に地図を探したが見当たらなかつたので、リュックに
 折り付けてある方位磁石を確認し、取り敢えず西に向かつて
 歩いてみる。すると、どうみても旅行者と見える集団を発見し、
 その後ろを付いて歩くと、なんと三分弱で広場に到着してしまつ
 たのだ。

オレつてば、すげえ！

とミロは、心の中で勝ち誇つた。これは、幸先が良い、と
 満面の笑みでぐるりと辺りを見渡して、白く輝く教会の尖塔
 を見つけたのだ。その時計は、今が十時五十三分であると告
 げていた。

ミロは、一三二二年に創建され、その後スコットランドの
 建築家であるジェームズ・ギブズが、イタリア・パロツクの
 伝統を基に設計し、米国をはじめ世界各国にある数多くの教
 会の設計に影響を与えたとされるセント・マーティン教会を、
 ネルソン提督の足元からじつくりと眺めた。そして、荘厳な
 古代ローマ風の建物の教会を目の端にいれつつ、十二月、今
 しか見れない広場の名物に向かつて、ミロは歩き出した。

巨大な、クリスマス・ツリーに向かつて。

広場の中央に位置する、このロンドン名物、巨大クリスマス・
 ツリーは、もう何十年も続くノルウェイからの贈り物だ。

一九四七年以来、ノルウェイは第二次世界大戦中における
 英国との協力を記念して、トラファルガー広場に立てられる
 巨大なクリスマス・ツリーを毎年オスロ市から寄贈している。
 ツリーには、ノルウェイ風に白色灯が五〇〇個も灯され、天
 辺には巨大なベツレヘムの星が輝く。十一月二十九日の午後
 六時半に最初の灯りが灯されてからは、毎日正午から真夜
 中までライトは輝き、翌年の一月六日まで、ロンドンの人間
 の目を楽しませる。また、クリスマス期間中は毎日午後五時
 からチャリティー・コンサートがその下で行われ、地元の聖
 歌隊などが貢献している。

ミロは、体に不釣合いな大きな荷物を抱えて木の下まで歩
 いた。ナショナル・ギャラリーの丸屋根よりは低い、けれど
 その建物の前に立つ木々よりは明らかに高い巨大なツリー。

こんなの、どうやって運んでくるんだ？

と首を傾げてぐるり一周してもう一度見上げる。見上げて、
 空に向かつて伸びる尖った先端に、一週間前に聞いたポール・
 リッジウェイの歌声が胸の中に蘇つた。

もう、あの声は聞けないのだろうか？

多分、もう聞くことはないだろう？

カミュの声と、絡み合い、追いかけてあうように上つていつ
 た歌声。思い出しただけで、胸が締め付けられて、苦しい。
 ポール・リッジウェイに嫌われていることは分かっている。
 しかし、その不快感を凌駕して尚彼の声はミロを魅了した。